

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：27401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04508

研究課題名(和文) 古典における地方と子ども 地域環境と共生する子ども物語 の教材化に向けて

研究課題名(英文) Regions and Children in Japanese classical literature: Research to compile "Stories of children who live in symbiosis with the regional environments" as teaching material

研究代表者

中井 賢一 (NAKAI, Kenichi)

熊本県立大学・文学部・教授

研究者番号：90580960

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究においては、学習者自身が様々な地理的環境や人的環境と共生しつつ成長する「地域環境と共生する子ども物語」を、新資料も含め、報告者自身が指導効果を臨床的に検証した上で教材化した。

本研究の目的は、「学習者の多読を促進できる教材の不足が古文離れの一因である」との現状認識のもと、学習者が自身を重ねやすく、且つ、未来に向けた規範にしやすい物語を集成したリーディング教材を高校現場向けに作成し、多読環境の整備に資することにある。

研究成果の概要(英文)：In this study I attempt to produce educational materials using "Stories of children who live in symbiosis with the regional environments" which encourage learners to grow up and live in symbiosis with the geographical environments and human relationships. The effectiveness in teaching with the stories chosen has been verified clinically.

The purpose of this study is to compile reading materials for high school students consisting of stories that help students to identify with the characters and provide them with future positive models in order to create a better-equipped educational setting for extensive reading, based on the present recognition that one of the reasons for decreasing interest in classical literature is shortage of reading materials which facilitate learners to read extensively.

研究分野：日本古典文学

キーワード：日本古典文学 国語科教育学 教材開発 サイドリーダー 学校現場へのフィードバック

1. 研究開始当初の背景

(1)平成 21 年改訂の「新学習指導要領」において、いわゆる「古典ばなれ」に対応すべく「伝統的言語文化」重視の方針が打ち出され、高校では平成 27 年に全面移行の完成年度を迎えた。この間、臨床教育学を主とした様々な学会において、効果的メソッドについての特集を組み、幾度も議論がなされているが、そのこと自体、この「古典ばなれ」の根深さと根本的対策の困難さを示唆していると思われる。

(2)上記(1)の解決に重要なのは、継続的に古文そのものを多読させる工夫であり、また作品そのものにある魅力的な内容に目を向けさせる仕掛けであると思われるが、例えば、検定教科書は、穏当な内容でありつつ文法・文学史の指導に有用な作品が選り抜かれたものゆえ、大幅な改訂は見込めず、また傍用教材には受験・検定向けのものが多く、「多読」を目的に「魅力的な内容」を精選するような教材は、本研究開始当時、存在しなかった。

(3)昨今、都市部と地方部の格差は拡大し、地方部からの若年層流出は深刻である。「地方」部の高校・高専・大学で教員経験を持つ申請者は、日々そのような「地方」軽視の学習者に接し、確固たる信念のない安易な「流出」については歯止めをかける必要性を痛感してきた。国策として「地方」活性化策が求められていることもあり、若年層を地域活性化のリーダーに育てるべく、まずは「地方」の特徴に根差しつつ成長していく生き方モデルを提示することで、地域と共生することの魅力に気付かせ、活性化へのエネルギーを育むべきと考えた。

(4)申請者は、前科研費研究(2012~2014)の過程で、都中心の政治体制への批判が強まる鎌倉~室町期の物語に「地方」で活躍する人物の描写が多いという結果を得ていた。

(5)申請者は、計 19 年間の高校・高専教員経験より、学習者は、たとえ有名作品であってもそのことだけで興味を持つだけでなく、学習者たちが自身にもありうる内容として作中人物の肩を持てるか、いわば心的距離の近さが重要であり、そのような教材に対しては主体的理解に努める傾向にあるとの分析結果を得ていた。

以上(1)~(5)より、申請者は、「地方」での積極的な生き方を描き、且つ、学習者と「心的距離の近い」古文物語を集成し、多読しやすいリーディング教材を編むという着想に至った。具体的には、都と異なる様々な地理的「環境」や人的「環境」の中で逞しく成長していく子ども像、いわば 地域環境と共生する子ども物語 を軸に、短篇集形式のサイドリーダーを編む。このような軸があれば、

自己を重ねることが容易になるだけでなく、学習者自身が 共生 のモデルや意欲を学び取ることも期待できる。また、短篇集的サイドリーダーであれば、検定教科書の優れた有用性は享受しつつ、並行して検定教科書には掲載されない様々な作品を幅広く読むことが容易となると考えた次第である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「学習者の多読を促進できる教材の不足が『古典ばなれ』の大きな一因である」との現状認識に則り、学習者が自身を重ね合わせやすい(=心的距離の近い)物語、且つ、学習者が生き方の規範にしやすい(=成長へのモデルとなりうる)物語を集成したリーディング教材を、主として高校・高専現場向けに作成し、古文の多読を促す指導環境を整備することにある。

教材のキーワードは 地域環境と共生する子ども物語 とし、新資料も含め、奈良期~室町期成立の多くの物語作品から、都とは異なった様々な地理的「環境」や人的「環境」と 共生 しつつ逞しく成長する子ども像を抽出し、教材として編集する。教材化に際しては、臨床教育学の見地から多角的に有効性を検証した上で、テキスト・注釈・指導案の例を公開できるよう作業を進めた。

深刻化する「古典ばなれ」への対処と同時に、「地域環境と共生する」意欲の涵養にも有用な教材の作成を目標とした。

3. 研究の方法

上記「目的」に達するべく、本研究期間を各年度ごとに分割し、以下の通り研究作業を行った。

(1)平成 27 年度の研究方法

奈良期・平安期の物語作品を対象に 地域環境と共生する子ども物語 の資料収集・分析と教材化を行った。

本年度は、対象を古事記・日本書紀・出雲国風土記・伊勢・うつほ・落窪・源氏・寝覚・浜松中納言・狭衣の各作品に絞り、都と異なった厳しい地理的「環境」や人的「環境」と 共生 しながら生きる子どものストーリー場面を抽出し、短篇集的に構成し教材化した。

本年度については、特に当時の「地方」のありようが理解できる補助資料や、記紀神話の背景資料について計画的に収集し、また、本文に関わる新資料に関しても積極的に調査を行った。

教材化に際しては、学習者が自学で理解できる「注釈」と指導者が授業の参考にできる「指導案の例」の作成を集中的に行った。「指導案の例」は、臨床教育学の観点から原案を作り、その有効性を多角的にダブルチェックする意味で、申請者所属校の「国語科教育法演習」受講学生とのディスカッション等を経て、適宜修正を加えた。

(2)平成 28 年度の研究方法

鎌倉・室町期の物語作品を対象に 地域環境と共生する子ども物語 の資料収集・分析と教材化を行った。

鎌倉・室町期の物語には 地域環境と共生する子ども物語 が多数含まれているにもかかわらず、検定教科書や従来の傍用教材では十分に採用されていない現状だけに、できる限り多くの場面を網羅するよう努めたが、御伽草子等、この時代には本文価値の評価が玉石混淆のジャンルもあるため、収集資料の内容と教材価値の吟味に、特に力を入れた。

教材化についても前年度同様に進め、吟味を経た「テキスト」に、「注釈」と「指導案の例」を付した。なお、鎌倉・室町期の物語といえ、検定教科書では軍記物語が採用されることが多いが、子どもが死や戦と関わるストーリーは、教育的見地からできる限り避けることとした。

(3) 平成 29 年度の研究方法

これまで蓄積してきた成果の再検証を行い、具体的な「教材」として編集した上で、公開の準備に努めた。

本年度は、本格的に教材編集を行うため、特に鎌倉・室町期物語については、高校の古典教材として適切であるか否か、教育学の見地からの再検証も必要になると考え、申請者自身の判断のみに頼るのではなく、専門的知見の提供を受けながら、慎重にその適切性について再検証することを心がけた。

成果は、本年度末に、最終報告書として取りまとめ、冊子版・データ版の二種に加工し、公開した。

全期間を通じ、本研究の遂行に際しては、「多読」の目的に鑑み、載録教材の質・量の担保が何より優先されるべきと判断されたため、拙速に陥ることなく、常に研究の進捗状況に即し、計画全体を柔軟に見直しながら、着実に成果を積み上げていくよう心掛けた。

また、教材の作成に際しては、編集作業が未完了の段階でデータの紛失・流出等があれば、各方面に多大な迷惑をかけることになるため、そのような事態を未然に防ぐべく、データ編集にはスタンドアローンのPCを用い、外部へのデータ持ち出しは一切行わないよう留意した。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

本研究は、地域環境と共生する子ども物語 というキーワードのもと、教材を学習者にとって「心的距離の近い」ものに変えること、いわば、教材自体を学習者に歩み寄らせることで古文そのものを多読させる仕掛けとする点が大きな特色である。同時に、その教材を多読することで、古文の理解力が高まるだけでなく、「地域環境」との関わりについて考えたり、また自身の 地域環境と共生する 意欲を奮い立たせたりする契機が、必然的に学習者に多く保証される点が、教育的

効果の観点から見ても特徴的であると考えられる。

具体的には、「都などの中央から離れた地方を舞台としたエピソード」、「異国を舞台としたエピソード」、「(仏道修養など) 世俗を離れた空間を舞台としたエピソード」に注目し、自然「環境」や生活「環境」、あるいは生育「環境」などの厳しさに、様々に打ち克つ物語場面を、以下【目次】に掲げた物語作品から抽出した上で、いずれも当該場面の本文・注釈と現代語訳・指導例等と併せ、教材化できた。

以下に本研究の成果として取りまとめた教材、兼、本研究全体の報告書の【目次】と【凡例】を掲げる。その上で、まず《教材篇》の内容について一例を示し、次に《資料篇》について説明する。最後に《論文篇》の二論考について概要を記すこととする。

なお、この「教材、兼、報告書」は、高校現場への配布用冊子として、また、現在整備中の公開用電子データの元データとしても利用するものである。

【目次】

《教材篇》

- 1 古事記
 - 2 うつぼ物語 (俊蔭 ver.)
 - 3 うつぼ物語 (仲忠 ver.)
 - 4 落窪物語
 - 5 源氏物語
 - 6 浜松中納言物語
 - 7 夜の寝覚
 - 8 唐物語
 - 9 山路の露
 - 10 今物語 (横川の僧 ver.)
 - 11 今物語 (松島の上人 ver.)
 - 12 松陰中納言
 - 13 岩屋の草子
 - 14 須磨記
 - 15 古菓物語
- #### 《資料篇》
- 16 『古菓物語』注釈
- #### 《論文篇》
- 17 補論 A

桐壺帝と左大臣 二つの 違背 と源氏物語の権力体制

18 補論 B

中村本『夜寝覚物語』における幸福的結末の論理 第二予告の表現と「結構」としての明石御方物語

【凡例】

- 作品の特徴
- 使用テキストと底本
- 引用【場面】に登場する 子ども
- 引用【場面】の概要
- 読み取らせたい事項・単元テーマ
- 授業に投げ込む場合の留意点・指導の方法
- 【場面】本文・現代語訳
- 補論 (まとめて「論文篇」に掲げる)

《教材篇》の内容の一例として、「1 古事記」を掲げる。～の項目は【凡例】に対応する。

上・中・下の三巻から成る現存最古の文献である。太安万侶による序文には、壬申の乱に勝利して即位した天武天皇が、「邦家の経緯、王化の鴻基」を後世に伝えるべく舍人稗田阿礼に読み習わせ、天武天皇死後の和銅五年（七一二年）正月に完成したものを、太安万侶が元明天皇に献上したとされる。国内向けに、皇位継承や皇室の系譜とその正当性を、神話を通じて示そうとする意図が感じられる。和漢混淆文で編まれ、国外を意識するゆえ漢文体で編まれた『日本書紀』とは対照的である。故事や伝承を重んじ、文学性に富んだ記述も多い。須佐之男命や倭建命など、貴種流離譚で有名な主人公も多く登場するが、今回は邇邇芸命（ニニギノミコト）の、いわゆる天孫降臨場面に注目した。

小学館『日本古典文学全集 古事記 上代歌謡』（底本：真福寺本）

（なお、引用に際しては、一部私に用字を改めた。また、[]は分注である。）

邇邇芸命

【場面】= 豊葦原水穂国を治めるべく邇邇芸命が筑紫の日向、高千穂に天降りし、国見と同時に、治世に相応の地であることを言挙げする。

「筑紫の日向の高千穂」という地方の重要性と歴史的背景。邇邇芸命の強い決意。

一般的な古語や文法事項のみでは読みにくく、古代前期独特の言葉遣いもあるため、あくまで応用段階に、学習者の視野を広げるための投げ込み教材として扱うことが望ましいだろう。一部の検定教科書では、倭建命のエピソードを採録しているので、その発展学習として位置づけても良いと思われる。「筑紫の日向の高千穂」を、学習者それぞれの地域に置き換えたり、中央を相対化したりする経験を通じて、多角的な視点、あるいは思考の複眼を獲得させたい。知識の提供のみに留まらず、深く思索する機会となるよう配慮されるべきであろう。

【場面】

ここに天児屋命・布刀玉命・天宇受売命・伊斯許理度売命・玉祖命併せて五伴の緒をわかち加へて、天降りたまひき。ここに其のをきし八尺の勾玉、鏡また草薙剣、また常世思金神・手力男神・天石門別神を副へたまひて、詔りたまはく、「この鏡は専ら我が御魂として、我が前を拝くがごとくいつきまつれ。次に思金神は前の琴を取り持ちて、政せよ」と詔りたまひき。この二柱の神は、さくくしろ、いすずの宮に拝き祭る。次に登由宇氣神、これは外宮の度相に坐す神なり。次に天石戸別神、またの名は櫛石窓神といひ、またの名は豊石窓神といふ。この

神は御門の神なり。次に手力男神は佐那の県に坐すなり。かれ、その天児屋命は[中臣連等の祖]、布刀玉命は[忌部首等の祖]、天宇受売命は[猿女君等の祖]、伊斯許理度売命は[作鏡連等の祖]、玉祖命は[玉祖連等の祖]、かれ、ここに天津日子番能邇邇芸命に詔らして、天の石位を離れ、天の八重たな雲を押し分けて、いつのちわきちわきて、天の浮橋にうきじまりそりたたして、筑紫の日向の高千穂のくじふるたけに天降り坐しき。かれ、ここに天忍日命・天津久米命の二人、天の石韌を取り負ひ、頭椎の太刀を取り佩き、天のはじ弓を取り持ち、天の真鹿兒矢を手挟み、御前に立ちて仕へ奉りき。かれ、その天忍日命[これは大伴連等の祖]、天津久米命[これは久米直等の祖なり]、ここに詔りたまはく、「ここは韓国に向ひ、笠紗の御前に真来通りて、朝日の直刺す国、夕日の日照る国なり。かれ、ここはいと吉きところ」と詔りたまひて、底つ石根に宮柱ふとしり、高天原に氷椽たかしりて坐しき。

（一二九～一三〇頁）

・五伴の緒=「伴」は同じ職業を示す「部曲」の意で、「緒」は「部曲」の長の意。

・さくくしろ=「五十鈴」の枕詞。

・外宮の度相=外宮の度相(わたらひ)の社の意。

・天の石位=高天原にある神座。

・いつのちわきちわきて=「いつ」は威力の意で「ちわき」は道を分けの意。

・うきじまりそりたたして=「うきじまり」は浮島ありの意で、「そりたたして」は胸を張って立ての意。

・宮柱ふとしり=「ふとしり」は太くさせるの意。

・高天原に氷椽たかしりて=「たかしり」は高くさせるの意。「氷椽」は千(ち)木(ぎ)の意で、神を祭った社の屋根に取り付ける。高天原まで届くくらいに千木がそびえた宮を造成すると解釈した。なお、須佐之男命が大國主命に「宇迦の山の山本に、底つ石根に宮柱ふとしり、高天原に氷椽たかしりて居れ。この奴よ」と言う場面がある(九九頁)。

訳 ここに天児屋命・布刀玉命・天宇受売命・伊斯許理度売命・玉祖命、併せて五つの部曲の族長にそれぞれ仕事を分担させて従者に加え、邇邇芸命は降臨なされた。……

(…以下、本成果報告書においては省略する…)

まず、として、当該作品の注目すべき特徴について概説した。文学史的特徴の観点のみならず、表現や内容構成、人物造型や全体構造等、作品論的特徴の観点からも、指導者・学習者に注意してほしい事項について触れるように心掛けた。

次に として、本文の依拠する底本について掲げた。特に古典文学作品の場合、写本によって本文の叙述に異同があり、写本間で人物造型が大きく異なることもある。古典作品が、多くそのような状況の中で成立・享受されていく事情について、学習者に早期に意識させたいと考えたためである。

次に として、教材として取り上げる場面の主人公を明示した。

続いて として、教材化した具体的な物語場面を概括的に列挙した。その際、極力、場面全体のアウトラインがイメージできるような情報を組み込むよう配慮した。

次に として、それら物語場面の読解を通じて、是非とも学習者に読み取らせたい事項や指導すべきテーマについてキーワード化・キーセンテンス化して掲げた。これは、いわば指導者が学習者に向けて発信すべき内容の「柱」と位置付けられる。

次に として、指導上の留意点と具体的指導方法の例について掲げた。この項目については、指導者向けのガイドラインとしてあることを想定しており、学習者への提示は特段必要ではないと思われる。

次に として、具体的物語場面の本文と、注釈と共に私に施した現代語訳の例を掲げた。現代語訳に際しては、有職故実をはじめ、登場人物の官職や補任等に関する情報についても注釈に盛り込むよう工夫した。また、高校の古文指導の現状に鑑み、出来る限り文法事項を素直に反映させた直訳となるよう心掛けた。

《資料篇》として、故築瀬一雄氏蔵本『古巢物語』に解釈・語釈を付した『『古巢物語』注釈』を掲げた。貴重な写本の研究に資するものと思われる。

《論文篇》として、A「桐壺帝と左大臣二つの 違背 と源氏物語の権力体制」、B「中村本『夜寝覚物語』における幸福的結末の論理 第二予言の表現と「結構」としての明石御方物語」を掲げた。

Aにおいては、幼少期の冷泉と夕霧を取り巻く人間環境と権力体制生成の関係を論じ、また、Bにおいては、中君(妹姫君)に与えられる天人予言と中村本テキストの『夜の寝覚』『源氏物語』に対する意義との関係について論じた。

A Bいずれの論考も、複雑な立場におかれた子どもたちと作品主題との関わりについて検証したものであり、思想的に本教材の作成を支えていると言えるだろう。

(2)得られた成果の位置付けと今後の展望

本研究を通じて、安定教材・定番教材と言われる有名物語作品だけでなく、決して著名ではないが教育的価値を有する物語作品をも教材化することができた。いわゆる共通単元のごとく、様々な「地方」の特徴と関わっ

た 地域環境と共生する子ども物語 という通底テーマを設けたことも、今日的課題と向き合う機会が担保される点において、有効であると思われる。

また、本教材には、現場の指導者が適宜活用できるよう指導例も簡潔に付した。研究の知見が、容易に現場にフィードバックされる点も特徴的であろう。

本研究のような方法論、あるいは形式に則って編まれた教材は、現在のところ存在しないため、本教材を多読用サイドリーダーとして活用することで、「古典」に対する学習者の「心的距離」が近づき、また「地方」との関わりを意識する学習者の増加が期待される。古典の知に学ぶ姿勢の育成にも一定の効果をも有すると思われる。

その他、本研究の方法は、様々な応用が可能である。今回は「地方」をテーマに据えたが、適宜、それ以外の諸課題についてテーマ設定を行い、同様の方法で教材化、教育現場へのフィードバックが可能であると思われる。例えば、近年の災害の頻発について、その事例と人々の処し方を古典の世界に求めることは、当該作品数も多く、比較的容易である。災害を、古典の知見に照らし、学習者自身の問題として考えることは、気象変動が言われる昨今、極めて重要だと思われる。このように、様々な今日的課題に対応した教育方法論として、本研究の発展性を見込むものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

中井 賢一、「左右の」大臣考 テキストとの向き合い方、国文研究、第61号、pp.15-34、2016、査読無

中井 賢一 他8名、『古巢物語』注釈、文彩、第12号、2016、査読無

中井 賢一、浮舟と夕霧 「忍草」と物語の二層構造、熊本県立大学文学部紀要、第20巻、第74号、pp.1-16、2015、査読無

〔図書〕(計1件)

中井 賢一、物語展開と人物造型の論理 源氏物語 二層 構造論、新典社、2017、400

6. 研究組織

(1)研究代表者

中井 賢一 (NAKAI, Kenichi)

熊本県立大学・文学部・教授

研究者番号：90580960